



遊離喪失の
トライアングル

作：宇古木蒼
絵：金田アキ

——「シユタインズゲート」へ到達した全ての人々へ捧ぐ——

秋葉原の裏通り、ブラウン管工房の前。二階の窓を見上げる
と電気が付いているのが見えた。

それに気づいたまゆりはラボに続く階段を意気揚々と上る。
きつと彼が先にラボに来ているんだろう。

「トゥットゥルル♪ オカリン、今日は早いね!!」

「へっ?」

ドアを開くと同時に、明るく声を張り上げてラボの中に呼び
かける。だが、帰ってきた返事はまゆりが聞き慣れたねぎらい
の声ではなく、驚きのあまり半ば裏返った若い女のものだった。

「牧瀬……さん」

牧瀬紅莉栖。数日前に岡部が連れてきた、ラボメンナンバー

004の女の人。

「ああ、椎名さんか。岡部なら、さつき遅れるって連絡があつ
たわよ」

「うん……」

長い足を組んでソファーに腰掛け、科学雑誌をめくる紅莉栖
の姿は岡部と同じくらい、いやそれ以上に堂に入っていた。

紅莉栖から邪心のない微笑みを向けられて、逆に居心地が悪
くなる。まるで自分こそが余所者であるかのような気分を振り
払おうと、まゆりは手に提げていたコンビニの袋から、から揚
げを取り出して開発室に向かった。

「ジューシーから揚げナンバ〜ワン〜♪」

まゆりの歌声も、静まりかえったラボの中ではどこか虚しく

響く。

開発室に置かれた電子レンジから揚げを入れて時間をセッ
トする。タイマーの秒数が減っていくのを眺めながら、まゆり
は岡部が突然に電話レンジ（仮）を捨ててしまおうと言いだし
たときのことを思い出す。あれはコミマを過ぎて少しした頃
だったろうか、あのときは本当にびっくりした悲しかった。
ダルが新しい電子レンジを見つけてくれるまでの数日間の事を
思い出すとそれだけでお腹が鳴ってしまいそうになる。

そうこうしているうちに、軽やかな電子音と共に電子レンジ
のターンテーブルが回転を止めた。

「でつきあがり〜」

「うん……」

熱々のから揚げをレンジから取り出したまゆりは、紅莉栖の
呟きに気づいた。

「何か足りない気がする……」

ぼんやりとした表情で電子レンジを見つめる紅莉栖の様
子に、まゆりはなんだか怖いものを感じてしまう。

「牧瀬さん、牧瀬さん!!」

「あ……」

気を取り直した紅莉栖がまゆりの顔を見つめる。だが、その
瞳は目の前にいる自分ではなく、それを通して何か別のものを
見ているように感じられた。そして、まゆりは紅莉栖のそんな
態度に接するのはこれが初めてではない。

何かを見透かすようなその瞳を前にすると、自分の中を覗かれているようで怖くなる。

「牧瀬さん、どうしました？ 大丈夫？」

胸の中にならずまく気持ちを押し殺し、まゆりは紅莉栖を気づかった。声を掛けるとその瞳の焦点が次第にまゆりを捉え始める。

「うん、大丈夫。ちよつとぼうつとしちゃつて」

感謝の言葉を述べながら微笑む紅莉栖。その姿に、先程までのどこかおかしな様子はわずかにも残っていない。

「あ、そうだー。牧瀬さん、から揚げいりませんか？」

「ありがと。三つくらいくれるかしら」

パックから皿から揚げを移し、楊枝がないので割り箸を添えて紅莉栖に渡す。まゆりから渡された皿を見つめ、困り果てた表情をする紅莉栖。

喜々として自分の分のから揚げを平らげ始めたまゆりへためらいがちに紅莉栖が話しかけようとした瞬間、ラボのドアが乱暴に開かれた。

二人がそちらに目をやれば、白衣を着た長身の男、このラボの主である岡部の姿がある。

「まゆり、もう来てたのか」

「オカリンだー!! トウツトゥルー♪ まゆしいは今日は学校が早く終わったのです」

「お、助手よ、どうした？ なにを固まつてる？」

「うるさいわね。ダメなのよ、私」

「もしかして牧瀬さんって鶏肉がダメだった？ ごめんなさい」

「ち、違うわ。そういう事じゃなくて……ほら、アレよ、アレ」

「ほほう…… そういうことか。謎は全て解けたぞ!! この鳳凰院凶真の天才的頭脳を持つてさえすれば、クリスティーナよ、お前の悩みを見破ることなど造作もないわ!!」

「だから私は助手でもクリスティーナでもないっていままでに何回も……」

「このやり取りを」覚えてる」この光景を「見たことがある」

「そんな不器用ガールにプレゼントだ。これを使うといい」

「フオーク……? え、なんでわかつたの?」

数日前に会ったばかりのはずなのに、岡部と紅莉栖はまるで旧知の仲のように振る舞っていた。その光景になぜ自分は見覚えがあるのだろう。

「これをマイフオークにするといい。何を隠そうこいつは特別製でな、ここの打刻を見ても」

「中央通りのコンビニで付いてくる奴じゃない。何が特別よ」

「そう、理由なんてわかつてる。だって全ては、わたしが「覚えてる」事だから。理由なんてわからないけれど、経験したことのない、知らない200年の夏休みの光景が、自分の記憶の中にあるのは紛れもない事実だから。」

ぼんやりと二人を見つめるまゆりの視線に、岡部も紅莉栖も

気づかない。その手の中では、パッケにのこった最後の一つのから揚げがすっかり冷めてしまっていた。

*

「オカリン!! 忘れ物だよ!!」

退院してきた岡部がふらりとラボに現れ、ラボメンバッジをまゆりとダルにプレゼントしていった日。

近所を散歩してくるとラボを出ていった岡部を追って階段を駆け下り、道路に飛び出したまゆりの声に通行人が次々に振り返る。

休日の秋葉原の裏通りを埋め尽くす人並みの向こうでは、見慣れた白衣姿の長身が角を曲がるどころだった。まゆりが走って追いかけてようとしたところで買物客に肩をぶつける。舌打ちする彼に頭を下げたときには、岡部の姿は視界から消えていた。

「オカリン、どこに行くんだろ……?」

たぶん秋葉原の街からは出るつもりはないと思うけれど、それ以上は判らない。退院したばかりの身で一人で出歩くのは危ないと言ったのに、聞き入れてくれなかったことを思い出してまゆりは胸を痛めた。

携帯電話を取りだし岡部の番号に掛けてみる。だが、発信音が虚しく響き続けるだけで聞き慣れた岡部の応答は電話から帰ってこなかった。

電池が切れているのか、それとも電源を入れていないのか。なんの当てもなく秋葉原の街を探し回るよりも、財布を忘れたことに気づいた岡部が戻ってくるのをラボで待つべきなのではないだろうか。

だが、いまこの瞬間に追いかけてなければ、彼がどこか手の届かない遠くに行ってしまったような気がまゆりにはしていた。

「オカリン……」

胸元に付けたラボメンバッジに、無意識のうちにまゆりは手をのばす。根拠なんかない。だけど、退院してラボに寄ったオカリンはどこかおかしかった。

いや、本当は重傷を負ってラジオ会館の屋上で保護され、入院しているときから薄々は気づいていた。それが決定的になったのが今日だったにすぎないのかもしれない。

「だからって、一人で何もかも抱え込まなくても良いのに」

オカリンに負担は掛けたくない。でも、悩みは出来るだけ自分と分け合っていて欲しい。ワガママなのかもしれないとは思うけれど、それがまゆりの正直な気持ちでもあった。

その時、人混みの向こうを横切ってゆく岡部が見えた。

「あ、オカリン——」

岡部がはつとしたような表情で足を止める。それと同時に、

岡部とすれ違った女性が同じように立ち止まった。足早に行き交う秋葉原の雑踏の中で、彼ら二人とそれを見つめる自分の三人だけ時間が止まってしまったかのようにまゆりは感じる。「やっと会えた」

ざわめきの中で、女性のすがるような声だけがなぜかはつきりと聞こえた。

「あなたを、ずっと捜していました。あるとき、助けってくれたあなたを、ずっと——」

年の頃は自分より少し上、岡部と同じくらいだろうか。立ちすくむまゆりの前で、整った横顔をいまにも泣き出しそうに歪めて彼女は岡部に向かって語りかける。

「私、一言、お礼が言いたくて。どうしても、あなたに会いたくて」
胸の前で手を組み、言葉を絞り出す彼女と、それをじつと見つめる岡部。あわただしく流れていく秋葉原の人並みも、不思議と二人を避けていく。

「本当に、ありがとう。……あなたが、無事でよかった」
心からの感謝を込めて彼女が告げる。その一言が過ぎ去ったあとに、二人は無言で見つめ合う。

「俺だ。なぜ彼女がここにいる？ 俺の"リーディング・シュータイナー"は反応しなかったというのに——なに!? 俺が守れだど!?」

岡部がポケットから取り出した携帯電話に向かってまくし立てる。まゆりにとっては見慣れたその仕草も、この場で見ると

なぜか胸が少し痛んだ。

しばらく喋り続けた岡部が携帯電話をしまい咳払いをする。その間もずっと、見知らぬ女性は岡部のことをすがるような目で見つめていた。そんな彼女に向かって岡部が優しく微笑みかける。

「また会えたな、クリステイナ——」

「いや、だから私はクリステイナでも助手でもないって言ってるだろう——」

「……っ!?」

その言葉に岡部が息を呑む。その一方で彼女も、自分の言葉が信じられないかのような表情をしていた。雑踏の中、さきほどまでとは一転して間の抜けた様子で二人は見つめ合う。

「これ、知ってる……?」

まゆりがぼつりと漏らした言葉は、二人には届かない。

"フーハハハ、クリステイナよ、お前は実に——"

"岡部、あんたねえ……"

岡部とあの女の人が話しているのを見るのはこれが初めてのはずだ。なのに、見たことも聞いたことのないはずの二人の「会話」がまゆりの脳裏に次々とよみがえる。

"まゆり、ほら——"

「紅莉栖ちゃん、あのね——」

ラボで優しく自分に微笑みかけてくれる彼女と、知らない名前前で彼女のことを呼ぶ自分。こんなの現実にあつたはずがない。だって、今年の夏休みのラボは、あの女の人なんて居なかったのだから。

理性が記憶を否定する。だけど、感情がそれをさらに上書きする。

見たことのない光景が、聞いたことのない会話が、知らないはずの単語が次々に頭の中を駆け巡り、まゆりはなにも考えられなくなる。

「ようこそ、我が助手、牧瀬紅莉栖……いや、クリスティーナ」
感極まり、泣き出しそうになりながら岡部がラボメンバツジを紅莉栖の手に握らせる。

「これが、シユタインズ、ゲートの選択だよ」

目の前で戸惑う紅莉栖を慈しむようなその姿に、まゆりは岡部に掛けようとしていた声を飲み込み視線を足元に落とした。わかつてしまった。ここには、自分の居場所はないんだって。オカリンの瞳の先には、あの綺麗な女の人しくないんだって。

オカリンが彼女に何か話しかけているのが聞こえる。もう、これ以上二人の会話を聞いていたくなかった。

「……っ!!」

きびすを返し、もと来た道へ駆けだす。どこをどう通ったのか、気がつけばラボの前にまた戻ってきていた。

「あ、財布……」

ポケットの中には、届けるはずだった岡部の財布が入った。まだ。何気ないその手触りが、いまはとでも重かった。

「まゆりちゃん、まゆりちゃん!!」

ソファーのとなりから掛けられた声で、まゆりの意識は目の光景に引き戻される。

「どうしたの? 何だかぼうつとしてたみたいだけど……」

「ううん。ちよつと昔のことを思い出してただけ。大丈夫だよ、るか君」

「そう……」

るかが何か言いたそうにしたあとで、膝の上で広がっているコズプレ専門誌へ視線を落とした。狭いソファーを二人で分け合っているの、気まずそうに彼が身じろぎするのがまゆりにはよくわかった。

「なんだと? この俺の素晴らしいアイデアが受け入れられないというのか? 助手よ」

「岡部のはアイデアじゃなくてただの妄想。いい? こうい